

『源氏物語』六十四貼の名目を暗記せんとせば

—『物覚秘伝』と西洋世界の記憶術

足 達 薫

古代ギリシアと江戸時代の記憶の達人たち

この世界に溢れる数えきれないほどの多様な事象と原理すべてを明確に記憶し、必要に応じて自由自在に語ることはできないだろうか。宇宙の構成原理、神々からもたらされる救いと懲罰、季節や時間とともに多様な色彩と形態へと変化する自然、人間の心と身体的作用と反応、社会を構成するために人間が磨き上げてきた学問や技芸や技術、そして人間の結びつきを支配する様々な概念、言葉、文章、祈り——これらに関する知識を、それぞれ混濁させることなく、正しい順序で鮮明に記憶し、語り、運用することができないだろうか。もしそのようなことが可能であれば、人間は、被造物としての受動的な存在から、この世界の有象無象の資源を自由に操作できる神のような存在へと進化したと述べることができるのではないか。

そのような文化的野心は、一方で、記憶を外部出力するツール

を開発することへ人間を導いた。文字、イメージ、数字、幾何学的方法などといったものは、まさしく、内面に保存しきれない記憶を外面に出力するためのメディアとして磨き上げられていった。しかし、その一方で、記憶の力それ自体を最大限に活用する道を見つけた人々もいた。それが、古代ギリシアで発見されたとされるひとつの技芸、記憶術（アルス・メモリアエ *ars memoriae*）である。

この技芸はいつ、どのようにして歴史の中に生まれたのだろうか。古代ギリシアにおける記憶術の起源が、記憶の女神ムネモシネと結びつく神話として語られるのではなく、詩人であったケオスのシモニデス（BC五五六―四六八）による発見物語として伝えられていることはきわめて意味深長である。つまり、記憶術は根本的に人為的技芸であり、自然（本性）を人工（技芸）で操作する人文主義的方法だったことが起源それ自体によって示さ

れている。

現在知られている限り、シモニデスによる記憶術発見を伝える最古の文献資料は、ラテン語文体の完成者とみなされたキケロ（BC一〇六-BC四三）が書いた対話『弁論家について』（*De oratore*：BC五五完成）である。後世の記憶術論には必ずといってよいほどくりかえし引用されるとともに、ヨーロッパにおける記憶術の伝統の核心となった記述がこれである。

わたしは、テミストクレスのように、記憶の術よりも忘却の術「*ut oblivionis artem quam memoriae malim*」を望むほどの偉大な才能は持ち合わせていない。だから、記憶術「*artem memoriae*」を初めて世に送り出したと言われているあのケオースのシモニデースに感謝しているのである（大西英文訳）⁽¹⁾。

キケロはここで、弁論家にとって必要不可欠な能力としての記憶について解説するために、この古い詩人に由来する伝統を強調する。それによれば、テッサリアの富豪スコパスの宴に招かれたシモニデスは、彼のために吟じた頌詩の報酬を半分に値切られてしまう。その作品ではレダを母とする双子カストールとポリュデウケースにも触れられていたので、残りの半額はその神話の中の兄弟からもらうがよい、とスコパスはうそぶく。しばらくしてシモニデスはその家を訪れた二人の若者に呼ばれるが外には誰もいなかった。一方、宴の部屋の天井が崩落して、スコパスとその親族たちは瓦礫に押しつぶされて死んでしまう。

身内の者たちが彼等を埋葬しようとしたが、めっちゃくちゃに押しつぶされていて誰が誰かどうしても見分けがつかなかったとき、シモニデースは、各人の横臥していた席を覚えており、その記憶を頼りに誰が誰かを示してやり、こうして一人一人埋葬することができたのだという。その後、シモニデースは、これにヒントを得て、鮮明な記憶をもたらししてくれる「*qui memoriae lumen afferret*」最大のものは順序「*ordinem*」だということを発見したのだというのである（大西英文訳）⁽²⁾。

この逸話を紹介したのち、キケロは、古代世界で普及していた記憶術に関する、きわめて有名かつ重要な一節を記している。

つまり、彼はこうだと考えたのだ、（記憶という）才能のこの部分を鍛錬しようとする者は、何かの場所「*locis*」を選び、記憶しておきたい物のイメージ「*effigenda animo*」を心に思い描き、それをそれぞれの場所に一つ一つ（順番に）置いていけばよい、そうすれば、場所の順番が物の順番を護ってくれ、物のイメージが物そのものを護ってくれることになり、そうして、われわれは、場所を（ものが書きつけられる）蠟板代わりに、イメージを文字代わりに使えばいい「*simulacris pro litteris uteremur*」のだ、と（大西英文訳）⁽³⁾。

そしてキケロはこう説明していく。記憶術師としての弁論家は、まず心の中に、明確で秩序によって区画化された「場所」（ロキ *loci*）を設ける。それは建物、広場、あるいは街路など、

はつきりと分節化されていることが望ましい。心の中に創造されたそれらの区画は、蠟板のように柔軟で、形態や色彩を速やかに帯びることのできる媒体として想定される。続いて弁論家は、それらの区画に、記憶しようと思う演説や文章に含まれる言葉を、何らかの方法でイメージに変換して、配列していく。

演説や著述に向かう弁論家は、心の中の場所に整然と並べられたそれらのイメージを言葉へと再変換し、語るべき演説を再構成する。この方法は、技芸の力を借りて人為的に記憶力を向上させ、増大させ、最適化する理論であり、かつ実践である。

弁論家にとって、語るべき演説を完全に記憶し、正確に語ることは必要不可欠である。不完全で未熟な演説は議会や法廷で命取りとなるし、読者を説得できない著作を読む人は少ないだろう。もちろん、そのような完全な記憶力は誰にも備わっているものではない。「……内容を整理もせず、書き留めもせずに、そのすべての言葉の順序、すべての文の順序をすっかり覚えてしまえるほど冴えた記憶力をもった人などまあ一人もないし、また、逆に、記憶の習慣的な鍛錬が何の助けにもならないほど記憶力の鈍い人もまあいないのである」⁽⁴⁾。そのように、記憶に自信を持ってない弁論家たち（そして多くの著述家、教師、政治家等々）を助けてくれる頼もしいツールが、キケロによってシモニデスに帰された記憶術である。

古代ギリシア・ローマ世界における記憶術の理論と実践は、キケロ以外にも、クインティリアヌス（三五頃ー一〇〇）の『弁論家の教育』（*Institutio Oratoria*：九五頃か）、紀元前八〇年頃より前にラテン語で書かれたテキスト『ヘレンニウスへ』（*Ad Herennium*）

によって伝えられている（ヘレンニウスという人物を相手に語られる修辞学講義書であり、『ヘレンニウスに捧げる修辞学書』などとも呼ばれる）。後者にはシモニデスの逸話は見られないが、前者は、キケロを参照しながら同じ事件を記録している。

キケロはシモニデスの記憶術は、アテナイのカルマダス（BC一〇〇頃に活動）やスケプシスのメトロドロス（生没年不詳）のような同時代の達人たちによって利用されると述べている。彼らに関する詳細はよくわからないが、クインティリアヌスは、彼らの驚異的な記憶力についてこう述べている。

私は、メートロドロスが、太陽が運行する天球の十二の図の中に三六〇もの場所を見いだしたということをまますもつていぶかるのである。それは疑いもなく、生来の才能というよりは、自分の技術のなせる業だとして誇っているこの人の記憶についての功名心と見栄がしからしめたものであったのである（小林博英訳）⁽⁵⁾。

クインティリアヌスが、三六〇もの場所にイメージを配置して運用する超人に対する疑念を呈しているのは意味深長である。記憶術は、一方では記憶の人為的強化のあらゆる事象を記憶して活用することを許す魔術的技芸として関心を集めたが、同時に一種の魔術、あるいは人々にはかない夢を約束する怪しげなはったりとしても見えたのだ。

しかしいずれにせよ、シモニデスに帰される記憶術（以後、場所法と呼ぼう）は、その後のヨーロッパ文化できわめて重要な役

割を果たし、信仰と神学、教育法、哲学、神秘主義、さらには美術と建築に至る多様な領域に深い刻印を残すことになる。場所法の多様な発展と変容、そして近代における衰退と忘却までの心躍らされる魅惑的な歴史は、パオロ・ロッシとフランセス・A・イエイツの基本研究によって強い注目を浴び、リナ・ボルツォーニとメアリー・カラザースを中心とする新たな研究者たちの手によつて、現在進行形できわめて豊かな成果を蓄積しているところである⁽⁶⁾。

だが、記憶を人為的に操作して利用しようとする発想そのものは、ヨーロッパのみに見られる特殊現象、あるいは文化的兆候ではないかもしれない。ヨーロッパ以外の多様な文化においても、類似した例や本質的に同じ形式を見いだすことができるかもしれない。あるいは、記憶の人為的増進を目的としつつもヨーロッパとは異なるなんらかの方法が見つかることもあるだろう。

それらの例を発見し、ヨーロッパ的伝統と比較することは、文化史的考察のためのリトマス試験紙としての記憶術の有効性をさらに高めることにつながるにちがいない。たとえば、江戸時代の日本にもまた、シモニデスの場所法ととてもよく似た記憶術が存在し、興味深いテキストが生み出されたという事実はきわめて興味深い。それは、明和八年（一七七二）、京都の書肆、八尾清兵衛が出版した冊子本『物覚秘伝』である（図1）。青水先生という人物が口授し、藤逸章が筆記したとされている。

図版に挙げた版の表紙には『物覚秘伝全』とあるが、本体では「物覚秘伝」とのみ記されている。翌年、別の書肆から『物覚秘伝後篇』が出されるので（後述）、「物覚秘伝前篇」と呼ぶほう

が正確なのかもしれない。しかし、話を複雑にして混乱を招くのもよくないので、ここでは、明和八年のテキストを『物覚秘伝』と呼んでおこう（このテキストに注目した井上円了の判断もそうだったが、円了については後で戻ろう）。

ヨーロッパの記憶術的伝統を踏まえてこのテキストを読む者は、シモニデスに関する記憶術発見の神話と驚くほど一致した記述に出会う。たとえば「物見知りの秘伝」と題された節の中にはこう書かれている。

たとえば広間に客一〇人列座す。ある人一見して、つぎの間に入るに、屏風を隔てて、その人数の座並またはその人の紋衣服の色をいうに、あるいは上座より下へ五番目の客は桐の紋に花色の衣服、下座より上へ三番目の客は柘の紋に萌黄の衣服などという。これを見るに果たして違うことなし、人々不思議に思ひしとなり⁽⁷⁾。

天井の崩壊とむごたらしい死体のような強烈な逸話はないものの、ここで述べられた方法が、シモニデスの経験ときわめてよく似たものであり、かつその場面設定そのものが似ていることにはまさしく驚かされる。この記憶の達人は、わずかな時間の観察のみで、多様な服装の一〇人を明確に区別しているとともに、並びの順番をも完全にコントロールして記憶している。この超人的記憶力の仕組みは、次のように解説されている。

この法は、前の器物一〇種の記憶のごとし。第一の客、紋と

色とを頂きとし、第二座の紋色を額とし、三座は目、四座は鼻と、人身の種にたとえ託して第一〇座臍に終わる。ただし記憶の術は、目を閉じて黙観するのみなり、この物見知りは、目を開き見るうちに、一物二種という簡法あり。これ物を見知る秘伝なり⁽⁸⁾。

この江戸時代の記憶の達人が用いた方法は、シモニデスに由来する場所法と完全に一致している。シモニデスは部屋の構造そのものを記憶の媒体にしたが、江戸時代の達人は人間の身体を用いて、一〇の「場所」(頭頂、額、目、鼻、口、咽喉、乳、胸、腹、臍)に一〇人の客の衣装を配置した。

古代ギリシアのシモニデスと、青水先生が語る江戸時代の記憶の達人。この二つの興味深い事例の類似はいかなる歴史的回路において生じたのだろうか。そして、このテキストは実際どれほどまで、ヨーロッパ的伝統と類似しているだろうか。

「妖怪博士」井上円了(圓了)は『妖怪学講義』と『活用自在新記憶術』でこのテキストに注目し、特に後者では本文を書き写して詳しく紹介している⁽⁹⁾。また近年では、甘露純規氏がこのテキストの歴史的文脈(特に朱子学教育との関係)を検討し、明和八年前後における記憶術の一时的流行といわばその諧謔的分身である忘却術の問題を考察している⁽¹⁰⁾。

しかし、『物覚秘伝』とヨーロッパの記憶術的伝統との比較検討は、具体的なレベルでは必ずしもなされていないようだ。これほどの興味深いテキストの存在が、グローバルな視野の外で埋もれてしまうのはじつに惜しいことである。

古代ギリシアのシモニデスと江戸時代の記憶の達人の驚くべき類似は、単なる偶然——鉱物の「仮晶化現象」(pseudomorphosis)のように似ているが異質な何かの比較——なのか⁽¹¹⁾。それとも、実線ではないにせよ、少なくとも点線的には連続しているのか。この問いを本格的に追求する最初のステップとして、この江戸時代のテキストと、ヨーロッパ的伝統における記憶術を比較し、その本性を明らかにしておく作業が必要である。

続くページで、このきわめて興味深いテキスト『物覚秘伝』を、ヨーロッパの記憶術的伝統と比較し、その記憶術的本性の射程を浮彫りにしていこう。その過程は、おそらく、ヨーロッパ的記憶術の本性を逆側から映し出す鏡のような効果を副産物的に生むだろう。

『物覚秘伝』とシモニデスの場所法

『物覚秘伝』は三壑外史という人による「物覚秘伝序」、天台山叟という人が書いた「序」、そして青水先生が口述したテキスト(付録を含む)から成り立っている。青水先生のテキスト(図2)は、無題の導入部分から、「依託種子」、「依託の法」、「器物験証」、「心法」、「形有有無」、「繁文」、「種有多少」、「総論」、「付録物見知の秘伝」、「一物二種」の各節に分かれている⁽¹²⁾。『物覚秘伝』出版の翌年(明和九年)、浅井庄右衛門らによって『物覚秘伝後篇』が出版されている。それには、前篇で提供した方法の応用例(歌や漢字の読み方などを覚えること)が紹介されているが、付録といった趣が強く、また記憶術そのものから離れる技

芸、たとえば掌を一種の計算機として用いる方法などが含まれているので、ここでは前篇に焦点を当てることにしよう。

先に触れたように（そして後に見るように）、青水先生が述べた部分はすでに井上円了によって書き起こされている。しかし、ヨーロッパ的記憶術と比較するための土台を作るために、あらためてテキストそのものに目を通すことにしよう。

青水先生はこのテキストの目的を示すため、『論語』に出てくる「学而第一」（がくじだいいつ）という言葉を通じて忘れてしまふ子供の逸話を挙げる。子供は、師匠からガクジという言葉で「字をかくと心得よ」と指導されたことで、以後、これを忘れることがなくなった⁽¹³⁾。学而という語の発音である「ガクジ」が、「字を書く」というイメージへと変換され、子供の心の中に刻み込まれたということである。このように、青水先生が紹介する記憶術は、「少しも高遠の術にあらず」、「魯鈍の小児」でも使いこなさうな芸芸として構築されている⁽¹⁴⁾。

青水先生の秘伝はシモニデスの場所法とほとんど完全に一致しており、「依託」と「種子」という二つの用語によって説明されている。言葉をイメージに変換すること、あるいは先に見た多様な衣装の記憶に見られるように、現実に即したイメージを思い浮かべることが依託（『詩経』における「賦比興のこころ」と換言される）、イメージを配列するための心の「場所」（ロキ）が種子である。

青水先生が最初に提案する「場所」の秩序は、人間の裸体であり、正面と両側面合わせて三〇の種子を利用することができる（図3）。

種子とは、たとへば人身の正面にかたどって、頂きを第一とし、額を第二とし、眼を第三とし、鼻を第四、口を第五、喉を第六、乳を第七、胸を第八、腹を第九、臍を第十とす。また人体の右辺に取りて、右の鬢を第一とし、右の耳を第二とし、右の肩を第三とし、右の臂を第四、右の手を第五、右の脇下を第六、右の脇を第七、右の股を第八、右の膝頭を第九、右の足を第十とす。また人体の左辺を取りて、左の鬢より左の足に至ること、右辺に同じ。以上、正面一〇、右辺一〇、左辺一〇、すべて三〇則をよく覚えいて、これを依託の種子とするなり⁽¹⁵⁾。

正面、右側面、左側面がそれぞれひとつのユニットとされ、それぞれ一〇個の種子が頭頂から下方へと順番に配列される。

身体を場所（ロキ）として用いる方法は、ヨーロッパでもかなり一般的だったらしい。たとえば、一五九二年に出版された、フランチェスコ会修道士フィリップ・ジェズアルドの記憶術マニュアル『ブルートソフィア（冥王の叡智）』には、『物覚秘伝』の挿絵とよく似た図が提示されている（図4）⁽¹⁶⁾。

青水先生の説明に返ろう。種子には、依託の方法で創造された「絵様」が配置される。

そのたとえることは、およそ世間にあらゆることを観念し、あるいは俚諺、写白字、謡曲、浄瑠璃、流行辞、なにによらず卑俗なることをも論ぜず、あるいは心中にて絵様をつくり、あるいは眼中に土地の景色を観じ、その品々の縁を取るなり。こ

れ自身の心裏に含める合符にして、他人に言い聞かすべきことにあらねば、人々の才智才覚にて、千変万化、数も限りなきこととなるべし⁽¹⁷⁾。

依託、すなわち記憶すべき事柄のイメージへの変換の対象は、「およそ世間にあらゆること」である。諺や語呂合わせや流行語の類い、文学や芝居や音楽の内容、そして自らが知る実風景から「緑」が取られる。それらのイメージは「千変万化」の多様性、「数も限りなき」拡張性を有している。青水先生の述べる依託におけるさまざまな目的のために応用される柔軟性は、シモニデスに帰される場所法の本性とまさしく一致している。

依託を巧みに行うためには相当の訓練と慣れが必要であることは容易に想像ができる。青水先生の言葉を借りれば、「目を閉じ雑念を生ぜず、心胸の間を清朗にして安静」にして集中しなければならず、「あるいはその種に一向たとえの工夫つかぬ」場合さえ有るかもしれないが、それでも時間をかけて努力すればかならず何らかのイメージが創造されるという。

身体を「場所」(ロキ)として用いる方法の次に、青水先生は、身体の三面すべてを使っても収めきれない数の依託が必要となる場合の方法を語る。それらの場合、家を種子として用いることが有効である。種子のためのモデルには、身体と家で足りなければ、町(家並びや店や目印となる場所)、名所、旧跡、寺社、東海道五十三駅、さらには東西南北のような抽象化された図式も用いることができる。それらを利用して依託する訓練を積みめば、青水先生が太鼓判を押す「物見知の秘伝」が得られることになる。

青水先生の依託の理論と実践において、言葉とイメージが互いに翻訳可能な何かとして、あるいは循環する何かとして記述されていることは特筆されるべきだろう。先に引用した、場所法に関するキケロの解説では、言葉のイメージへの変換という一方的な方向が強調されていた。しかし、青水先生の場合、両者の関係は可逆的であるという。

総じて万種の無形のものを記憶するには、有形の物にてたとえ、また有形の物を記憶するには無形の物にてたとえるなり。これ斯道の一大緊要の秘策なり。有形の物とは人倫、鳥獸、器財、草木、衣食、宮室の類、しかと目に見るものをいい、無形の物とは言語、数量、時候、虚態門の類いの、目に見えざるをいう⁽¹⁸⁾。

興味深い説明だが、残念ながら、青水先生はこの変換過程について具体的に教えてくれない。有形のもの、つまりそれ自体イメージを持つ事物を、言葉や概念のような不可視のものに変換することができるのは当然のように思われるが、他方、その逆の変換はどうするのだろうか。

この疑問への完全な答えにはならないかもしれないが、青水先生が挙げているひとつの注目すべき範例では、言葉とイメージの循環的關係が興味深い方法で利用されている。それは、『源氏物語』の全名目を記憶する離れ業めいた方法である。

『源氏』六十四貼の名目を暗記せんとせば

紫式部『源氏物語』の六十四帖（と先生は述べている）の名目を記憶するためには、その数に見合うだけの種子が必要であるから、家のあらゆる部分を活用しなければならない。ここで青水先生が想定している記憶の素材は、『源氏物語』そのものであったかもしれないが、現代では聞き慣れない六十四貼という区分から推測するかぎりでは、いわゆる源氏物語巻名目録の一例だったのではないだろうか。あるいは、有名な『源氏六十三首之歌』のような歌集化されたバージョンだったかもしれない。

ソースの特定以上に重要なのは、この六十四貼全名目の記憶法についての説明が、『物覚秘伝』で解説される方法の中で最も鮮やかな効果を読者に与えることである。同時にこの範例は、素材となった『源氏物語』という文学的テキストの本性もまたある意味では記憶術的側面を持つことを教えてくれる。

たとえば『源氏』六十四貼の名目を暗記せんとせば、まず第一は総廓なり。その廓の傍らに常に桐の木を植えたりとたとえ、第二は門なり。門の内に箒木ありと覚え、第三は中間部屋なり。この部屋にひとなし、蟬の抜け殻とたとえ、第四は玄関なり。これへは使者の顔の出ずる所と覚ゆ。その余はこれに準知すべし。しかれば第一に桐壺、第二に箒木、第三に空蟬、第四の夕顔と知る。これはわが居住の第一には総廓あり。そのつぎにはわが屋敷の門あり。そのつぎには中間部屋あり。その向かいには玄関なりと、もとより覚えているところへ、今の名目の縁を取りて心覚えして、それぞれへ預けたる故、おのずから

一、二、三の次第みだることなく、逆さになるともまたは一つはざめになるとも、自由自在に記憶せられるなり⁽¹⁹⁾。

家の囲いに置かれた桐の木は桐壺の、門の箒は箒木の直接的イメージである。第三貼「空蟬」では、空っぽの部屋がひとたび蟬の抜け殻のイメージに変換され、最終的に空蟬となる。第四貼「夕顔」は、門を開くと使者の顔が見えるというイメージで記憶される（ここで夕顔がたとえば花の夕顔へと単純に変えられないことはきわめて意味深長である）。この方法が、古代ギリシアで生まれたとされる場所法の原理とほぼ正確に一致していることは後に見ることにしよう。

ここで興味深いのは、青水先生が、多くの古典文学作品の中から、『源氏物語』という、きわめて視覚的な性格を持つテキストを選んだことである。すなわち青水先生は、『源氏物語』が持つ「絵画的」と呼んでよい本性を、場所法（先生の述べる依託種子）によって分析的に解体し、並べ直しているのだ。

この偉大な文学作品の強烈な魅力のひとつに、登場人物たちに重ね合わせられた象徴的であると同時に具象的な名前が与えられていることがある（光源氏、藤壺の宮、葵の上、紫の上、空蟬、夕顔、若紫、末摘花等々）。いわば、各貼の名目（桐壺、箒木、花宴等々）を媒介にしてきわめて強い視覚的效果が構造的にインストールされている。読者は、言葉で表されたそれらのイメージを物語に重ね合わせながら、いわば言葉とイメージの循環的關係で構築された一種のゲームを読む／遊ぶ⁽²⁰⁾。

川名淳子氏の一連の研究は、『源氏物語』と『紫式部日記』に

含まれた様々な遊戯と絵画作品の機能に注目し、それらのテキストの視覚的性格を浮彫りにしている⁽²¹⁾。特に興味深いのは、テキストの中で繰り返し現れる絵画作品とそれを見る人物の関係は、この作品とその読者の関係と入れ子構造をなしている、という指摘である。

そうだとすれば、このテキストの著者は、絵画（イメージ）を見るようにして物語（言葉）を読むゲームに読者を誘うゲームマスターであり、それに応じる読者はプレイヤーになると言えるだろう。

名目録や歌集形式の名目録は、単なる『源氏物語』の要約ではない。それらは、言葉とイメージの循環的關係に基づくゲームの本質的構造を図式化し、著者から仕掛けられたゲームに応じる読者を助けるツールである。そして、各貼の名目を記憶術の方法で覚えることを提案する青水先生は、いわば、紫式部の挑戦に対して、新たなゲームを作り出すことで応じる大胆なプレイヤーと言える。

額から炎を吹き出し、臍で茶を沸かす男

このように『物覚秘伝』における記憶の手順は、古代ギリシアで発見されたとされる場所法の記憶術にほとんど正確に照合している。この一致はいかなる歴史的回路で生まれたのだろうか。その問題については後で戻ることにして、今はこのテキストに含まれたもうひとつの興味深い次元に進もう。それは、記憶の過程において創造されるきわめて驚異的な怪物的イメージの問題である。

『物覚秘伝』で解説された記憶術の過程は、古代ギリシアに由来する場所法と一致している一方で、記憶のメカニズムに関する踏み込んだ理論的説明が欠けているという相違点もある。後述するように、古代ギリシア・ローマの場所法では、心の中の「場所」（ロキ）に置かれるイメージは、後述するように、すぐに色あせて心から出て行ってしまいうような儚いものであつてはならず、より長いあいだ刻印され、鮮明さを失わない誇張的で具体的なイメージであることが要求され、また推奨されていた。ところが青水先生による依託に関する説明には、そこまで踏み込んだ解説が見られない。

少なくともテキスト上では青水先生の関心はもっぱら簡便な実用的マニュアルの提案だったようである。しかし、それだけだろうか。このテキストで挙げられた記憶の範例は、きわめて異様な、非現実的なイメージ世界として創造される。それはたとえば、先に見た『源氏物語』六十四貼の名目を記憶するための家のイメージである。この家では、物語の直線的で連続的な流れは解体され、名前をイメージへと変換されたものたちが物理的な構造を無視して住み着いている。空蟬は無人の部屋そのものとなる。夕顔は花ではなく、使者を迎え入れる戸口となる。

青水先生は、ひとりの記憶の達人による依託種子の実践例を紹介している。そこでは、『源氏物語』に関する記憶法以上の驚くべきイメージが創造される。その老人は、手拭、火鉢、毛氈、硯箱、琴、末廣、文箱、鏡、鍋、茶碗の一〇のイメージを、正面観の種子に配列する。

以上一〇種、いかがして記憶せりやと問う。答えていう、第一の頂きに手拭を置くとたとえ、第二の額に火鉢の火をたとえ、第三の眼に物見せる、もうせんとたとえ、第四の鼻に、すずばな、すずりとたとえ、第五の口に、言葉の琴をたとえ、第六喉に、咽喉を通れば末は広たとえ、第七の乳に、文箱に房あり、乳房とたとえ、第八の胸に、胸の鏡とたとえ、第九の腹に、鍋いっぱいの食は腹ふくるとたとえ、第十の臍が茶を沸かすとたとえ……記憶せりという。みなみな大いに絶倒す、⁽²²⁾

〔傍点強調は引用者〕。

きわめて怪物的なイメージである。頭に手拭いを乗せ、額から火を噴き出させ、毛氈で目隠しされ、伸びた鼻は硯と化し、口を開けば琴の弦が張られていて、喉は異様に末広がりとなり、両乳首は箱形となり、胸は鏡になって世界を反映し、腹は大きく膨らみ、臍では茶瓶が沸騰している怪物的な男——このイメージを聞かされた人々が、「みなみな大いに絶倒」したのは無理もない。彼らは、単に場所法の秘伝を聞いて驚いただけではなく、老人の解説を聞きながら自分たちの心の中で創り出された怪物的なこの器物人間の姿に腹を抱えて笑ったのではなからうか。

古代ギリシア・ローマの記憶術にも、こうした怪物的イメージの創造という副産物が含まれていた。古代ギリシア・ローマにおける場所法の記憶術では、そのような怪物的イメージは、しばしばイマギネス・アゲンテス (imagines agentes)、すなわち「力強いイメージ」(生きているイメージ、活き活きしたイメージなどとも訳すことができる) と呼ばれた。

もしも、いわゆる場所法の記憶術の形成において、そのような要素が除外されて、実益のみが追求されていたならば、おそらくその伝統はすぐに消えていたのではないかとさえ思われる。記憶術は、言葉とイメージの循環的構造を活用し、怪物のようなイメージを創り出す遊戯的な技芸という性格も持っているのだ。青水先生が伝える記憶の達人が創造する器物人間は、そうしたヨーロッパ的伝統における記憶術の遊戯的側面と照合している。

イマギネス・アゲンテスは、古代の記憶術に関する情報を伝えてくれる三つのテキスト、キケロ『弁論家について』、クインティリアヌス『弁論家の教育』、『ヘレンニウスへ』の中にすでに現れている。『物覚秘伝』の中の怪物的イメージと比較するためにも、ここで古代の記憶術におけるイマギネス・アゲンテスに関する解説に立ち戻ることしよう。

殺人現場の目撃者は羊の羣丸になる

その前提として、古代の記憶術におけるイメージの本性をめぐる認識の基盤となったテキスト、アリストテレス (BC三八四―三二二) に帰される『記憶と想起について』を見なければならぬ。なぜなら、『記憶と想起について』には、記憶術自体は説明されていないにせよ、場所法をめぐる古代の基本三文献に共通する基盤的認識が明示されているからである。

著者は、記憶のメカニズムにおける基盤は「表象像」(ファンタズマ)、つまり心の中に印象として刻みつけられるイメージであると述べる。これは記憶ばかりでなく、あらゆる心の作用に共

通する原則である。「そして表象像なしにはひとは思惟すること
はできない。——というのは思惟する場合には幾何学において図
形を引く場合と同じ事情があるからであ」り、「……記憶はそれ
が思惟されるところのものの記憶であつても、表象像なしには不
可能である」(第一章450a, 5) ⁽²³⁾。

表象像には一種の生命力があり、心の中に刻みつけられる強さ
は一定ではない。その生命力は、人間の記憶力の差に応じて多様
である。たとえば、幼い者の心は「流れる水」のようなものであ
り、イメージは木の葉のように流れていくだろう。老いて古びた
心はまるで荒れた建物のように、印象の刻印をはね返すだろう ⁽²⁴⁾。
そして著者は、記憶術の裏付けとなるような記憶論を提示する。

……(記憶力を高めるための)練習はそれを繰り返し思い出
すことによって記憶を保持する方法である。が、これは或るも
のをそれだけのものとしてでなく、しばしば肖像として考察す
ることにほかならない(副島民雄訳) ⁽²⁵⁾ (第一章451a, 19)。

第二章では、この記憶の「練習」のために数学的・幾何学的な
イメージの操作を利用したり、「場所」(トポス)を利用したりす
ることが示唆されている。具体的な記述ではないが、「肖像とし
て」という言い回しによって記憶術におけるイメージの利用が暗
示されている。

このメカニズムは、キケロによってくりかえされるが、そこで
は、生命力をもつ心の中のイメージはさらに具体化される。

……印象深く、適度の間隔をもつて截然と区切られた多くの
場所を用いなければならないのである。いっぽう、イメージの
ほうは、活き活きとして、明瞭で、際だつもの、心を素早く刺
激し、心に即座に浮かんでくるものが用いられなければならない
「[imaginebus autem agentibus, acerbis, insignitis, quae occurrere
celeriterque pervenire animum possunt] (大西英文訳) ⁽²⁶⁾。

心に刻まれるイメージは、まるで生きた何かのように力強く、
刺激的で、心の中で動き、明瞭な存在でなければならない。キケ
ロはこの原則を、シモニデスに帰している。それによれば、シモ
ニデスは、ギリシアの伝統(とくにプラトン)に基づき、人間の
五感で最も鋭く最も力強いものを視覚だと考えていた。視覚に
よつて心に「……刻印されたものこそわれわれの心に最も強い心
象を生み出す」。したがつて、「目に見えないものや視覚の判断の
領域外にあるものは言わば具体的なものの「conformatio
quaedam」、つまり、イメージや形[imago et figura]として書き
留められるために、われわれが思考(のみ)によつてはほとんど
維持できないものも、言わば心の眼によつて保持できるようにな
る」 ⁽²⁷⁾。

ラテン語による演説様式の完成者として名高い雄弁家キケロ
が、演説でどのようなイメージを創造して利用していたのか、と
ても気になるところである。が、残念なことに、彼が何らかの具
体な例を教えてくれなかった。

一方、場所法におけるイマギネス・アゲンテスに関するさらに
具体的できわめて魅力的な例は、『ヘレンニウスへ』の著者に

よって与えられている。今では名前が分からなくなってしまった著者（一四〇〇年代終わり頃までキケロに帰されていた）は、ヘレンニウスという弁論家志望者（？）への講義という形式で、実にサービス精神に富んだ語り口調で、古代の記憶術に関する実に興味深い細部を私たちに教えてくれる。後に見る例のように、驚くほど奇怪な範例が挙げられるため、実際に弁論家はそのようなことをしたのだろうかという疑問さえ湧いてくるほどだ。だが、そうした極端なほどのサービス精神は、このテキストに単なるマニユアルに留まらない、きわめて魅力的な色彩を与えている。

この著者によれば、イメージには、人間やその他の生物、あるいは多様な自然現象と同じように、一種の生命力がある。イメージにも年齢があり、生まれてから消えていくまでの時間がある。この認識もまた、先に見たアリストテレスの記憶論におけるイメージの理論に依拠している。

この著者による説明を少しのあいだ聴いてみよう。一般にイメージは、「力強く鋭い」(*firmae et acres*)ものと、記憶に刺激を与えることがほとんどできない「鈍くて弱い」(*inbecillae et infirmae*)ものに分類される。毎日の生活で見慣れた陳腐で、ありきたりで、つまらない出来事はすぐに忘れられるが、新奇な現象や驚異的事象はなかなか忘れられない。「例のないほど卑しい物、不名誉な物、非凡な物、偉大な物、驚くべき物、賞賛すべき物」のイメージのほうが、心の中で持続する生命力が強いのだ。毎日の太陽の動きに比べて、日蝕や月蝕はなんと驚異的で、忘れたいイメージとなるだろうか⁽²⁸⁾。

そして著者は、爆発的な笑いを誘いかねない奇抜きわまりない

イメージを範例として示す。イエイツの基本研究『記憶術』において記憶術的伝統の核心をなす一節として強調された有名な例だが、『物覚秘伝』の怪物的イメージと比べるためにも、ここでも間近で見えてみよう。

しばしば、論題全体の記憶をひとつの表し方、ひとつのイメージで理解することがある。たとえば、告発者が、被告が毒でひとりの男を殺害したと述べ、犯行動機は遺産相続であったと告発し、その犯行には多くの目撃者と従犯者がいたと告発したとしよう。もし、弁護を容易にするために第一の点を覚えておこうとするならば、第一の場所に事件全体のイメージを置くのがよい。もし、問題の男の姿を知っているのならば、ベッドで病に伏しているその男を思い描こう(*faciemus*)。もし会ったことがなければ、他の誰か、すぐに思い出すことのできる人であって、しかし身分の卑しくない誰かをその病人として用いよう。そして、被告をベッドの側に立たせ、右手に器、左手に書字板(*tabulas*・遺言や証書も意味した)を持たせ、左手の薬指には羊の辜丸(*testes*・類似する言葉である証人たち *testes* を表すイメージ)を付けよう。こうすれば、毒殺された男、遺産相続、目撃者を覚えることができる。このようにして、それぞれの場所に訴訟の各要点を順序よく並べて配置していこう。そして、いずれかの点を思い出したくなったらいつでも、場所を適切に並べ替え、集中してイメージの特徴を捉えれば、必要な記憶を容易に思い出すことができるようになる⁽²⁹⁾。

この一節に注目したイエイツがあまり気にしていなかったらしいのが不思議だが、この殺人現場のイメージが、場所法の記憶術そのものを図解する一種の説明書のようなものとなっていることがきわめて興味深い。この例では、イメージそのものが場所（ロキ）として構成され、そこには言葉から変換されたイメージ、たとえば書字板に変えられた遺言や、羊の睾丸にされて犯人の指に結び付けられた証言者が配置される。この犯罪現場はいわばメタ場所法、すなわち場所法の記憶術とはいったいどのようなものなのかを表すイメージなのだ。

なぜこのように衝撃的（笑撃的）と書いた方が適切かもしれない）なイメージをことさらに例示する必要があったのだろうか。なぜならば、心の場所に置かれるイメージは、誇張されたり歪められたりすることによってこそ、長く強い生命力を持つようになるのであり、そのことを示すのがこの奇妙な殺人現場のイメージなのである。

それゆえ、記憶の中には、もつとも長くこびりつくようなイメージを持つべきである。それを実現することができるとすれば、できうるかぎり直接的な類似物（similitudine）を置くこと、あるいは、ぼんやりもせず不明瞭でもない、イマギネス・アゲンテス（*agentes images*）を構築すること以外にない。それらのイメージに、非凡な美や特別なほどの醜さを与えるならば、あるいはまた、もしそれらのうちの幾つかに、たとえば王冠や紫色の衣装を身につけさせるならば、それゆえにその模像はわれわれにとってますます際立つものとなるだろう。あるいは

はさらに、もしも、われわれが、たとえば血で汚したり、泥をなすりつけたり、赤い絵の具を塗りとくったりして、それらの形を歪める（*deformabimus*）ならば、それによってその形はもつと直接的になるだろう。あるいは、われわれのイメージになんらかの喜劇のような効果を加えることによって、それらをもつと簡単に覚えることが出来るようになるだろう⁽³⁰⁾。

現実の忠実な再現（ミメシス）とは正反対の方向へと進むこのイメージ創造法はきわめて魅力的である。イマギネス・アゲンテスの理論はおそらく、美術史や文学史における非再現的傾向（たとえばいわゆるグロテスク）の考察にとつてもきわめて興味深く、意味深長なりトマス試験紙となるはずである。

福音書を覚えるための怪物的イメージ

他方、イマギネス・アゲンテスに対しては批判も存在した。たとえばルネサンスでは、人文主義的学知の巨人ロツテルダムのエラスムスと魔術師アグリッパ・フォン・ネットスハイムという対照的な二人が、ともに異議を唱えている（これについては別の機会に述べたい）。怪物的なイメージを用いて学問を目指したり、信仰に役立てたりすることに關してある種の人々の中に嫌悪感が生じるであろうことは容易に想像ができる。

しかし、そうした批判にもかかわらず、場所法とイマギネス・アゲンテスの伝統は、古代以降、様々な変化や変種を生み出していく。

その中で生み出されたひとつの興味深いイメージ（図5、図6）を、『物覚秘伝』の器物人間と比べてみよう。

一四七〇年頃、おそらくバヴァリア地方の修道院で制作されたブロックブック形式（活字印刷と並行的に展開した印刷法で、テキストと挿絵が板に刻まれて刷られる書物形式。挿絵が主体で、テキストはそれへの註釈となり、したがって文字の量は少なめで断片的となることが多い）の記憶術マニュアルが制作された。このテキストはのちの一五〇二年、ゲオルク・シムラーによって再編集され、フォルツハイムのトマス・アンセルム（？一五二三）によって刷り直されている⁽³¹⁾。

テキスト部分の最初の言葉を借りて『記憶術』(Ars memorandi)と呼ばれてきたこのテキストは、現代の記憶術研究をリードするメアリー・カラザースが中心となって編集した中世記憶術文献アンソロジーの中で特筆されたこともあって、近年、新たな注目を浴びている⁽³²⁾。ここでは、その解説に基づきながら、この強烈な魅力を発する怪物的イメージの例を見てみよう。

このテキストの目的は、新約聖書の四福音書の主だった出来事を場所法によって記憶するための範例を提示することである。福音書ごとに六から八程度の事件が一ユニットとなり、テキストによる簡潔な説明と、対応するイメージが見開きで置かれる。

四福音書を表すイメージの場所（ロキ）は、それぞれの著者とされる使徒の象徴物（この場合は、聖書のテキストから伝統的に導き出されたアトリビュート）、すなわちヨハネは鷲、マタイは天使（人間）、マルコはライオン、ルカは牛である。それらが手足を拡げて正面向きになったイメージの中や外に、キリストの生

涯に関する事件がイメージに変換され、配置される。イメージの順番は、頭頂部から胴を通して足下まで進み、両手ないし両腕に戻ることが多い。

ここに挙げたのは、この興味深い記憶術マニュアルの最初のイメージ、『ヨハネによる福音書』のいくつかの場面を表す怪物である。イメージの上部に、「最初に見えるのは鷲の顔をしている。このヨハネのイメージは、神の偉大な誕生を表す」と註記されている。

頭部（1）は三位一体のイメージである。鷲の左がイエス、頭頂部には精霊を表す鳩、右が神である。これはイエスの受肉を記憶するためのイメージでもある（『ヨハネによる福音書』第一章に対応）。

胸部（2）にあるリユートは、イエスがカナで参列した婚礼の宴を表し（第二章一―一）、その下に唐突に取り付けられた三つの袋は、イエスによって神殿から追放された金貸しを表す（第二章一三―二二）。

鷲の下腹部（3）の割れ目は女陰である。この衝撃的なイメージは、イエスがニコデモに対して述べた言葉、「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」（新共同訳）が変換されたイマギネス・アゲンテスである（第三章三）。

足下（4）の桶はイエスとサマリアの女の井戸の傍での出会い（第四章一―三〇）、王冠は、イエスによって癒やされた王の役人の息子（第四章四三―五四）を表す。

鷲の右翼（我々から見て左）（5）には、水の中の魚がある。これは、ベトザタと呼ばれる池に集まった病人たちを癒やしたイ

エスの奇跡を表すイメージだとされている（第五章）。

左翼（6）にある五つのパンと二匹の魚は、五千人の民にイエスが与えた食事（第六章一―一五、特に九）、イエスの磔刑が表された皿は、受肉と聖体の奇跡に関するイエスの言葉（第六章二二―五九）を圧縮したイメージである。

実に奇抜で、衝撃的で、同時に強烈なユーモアを感じさせるイメージである。聖なる主題が、このように怪物的なイメージに変えられることに抵抗感を抱く人もいただろう。しかしその一方で、自らの想像力をフル稼働させ、こうしたイメージを創造し、完全に暗記するには難しい長いテキストを圧縮して自分の内面に保持するという過程は、単なる学問を超える遊戯的魅力を強く感じさせるだろう。視覚と心を媒介にして、言葉とイメージの間に循環的關係を構築し、そのどちらをも身体に刻みつける。このきわめて特異な遊戯的性格こそが、おそらく、いかなる実用的可能性をも超えて、場所法の長い伝統を支えた核心だったのではないだろうか。

『物覚秘伝』で紹介された、人々を「絶倒」させたあの器物人間と、福音書の事件を身体化した怪物的な聖なる驚は、言葉とイメージを操作する人間の本性に強く訴えかける魅力と本性を共有している。

『物覚秘伝』の歴史的文脈——テキスト暗誦vs場所法

このように、『物覚秘伝』とヨーロッパにおける記憶術の伝統の間には、無視しがたい明確な類似性がある。構成要素、手順、

そして根本的発想そのものの共通性は、この類似が、鉱物の「仮晶化現象」のような偶発的な擬態関係ではないかもしれないという疑い呼び起こす。両者が、単なる似て非なるものでなく、何らかの方法で実際に結びついているという可能性はないだろうか。これからしばらく、この疑問を追求してみよう。

まず『物覚秘伝』の誕生背景を探ることから始めよう。

上記の甘露純規氏の調査によれば、『物覚秘伝』は、明和八年、京都における一種の記憶術ブームの初期段階の代表的なテキストであり、いくつもの剽窃版が出版されたという。そして、『物覚秘伝』を含むそれらのテキストは、同時代の京都においてきわめて強力な権威を確立していた儒学、特に朱子学の学習方法に対する一種のアンチテーゼであったかもしれないという。朱子学では、テキストの完全暗記が最も基本的な学習法であり、その壁は容易に突破できるものでなかった。おそらく明和八年の記憶術ブームは、そうした「儒教修得についていけない学習者と上層農民」であつたのではないか⁽³³⁾。

これはとても魅力的な仮説である。しかし、テキストの完全な暗誦が必ずしも朱子学に限られていないことも確かである。日本や中国で古くから最も基本的な方法として存在したことはここで今更言うまでもないかもしれない。四書五経や仏典は正確に記憶することが大前提だし、随の時代から長く続いた科挙の試験などまさしく暗誦の完全性の競争である。聖徳太子のいわゆる「豊聡耳」の神話も、聴力や理解力の卓越を示すばかりでなく、超人的な記憶力の物語と考えるほうがよいようにも思われる。

その他、稗田阿礼や空海のように超人的な記憶力で知られる歴

史上の人物たちもいる。彼らの記憶の方法がいかなるものであったかを考えると、おそらくはテキストの完全な暗記だろう。空海が修めたとされる虚空藏求聞持法は、文字と音声を媒介にしてテキストを実に一〇〇万回も繰り返して記憶する方法だった。

『物覚秘伝』が出版された時期、そうしたテキスト完全暗記式の学習から疎外され、いわばアカデミックな知の壁に阻まれた人々のためのツール（実際にどこまで役に立ったかは疑わしいにしても）として記憶術が流行した可能性はある。先に引用したキケロの一節を思いだそう。「……内容を整理もせず、書き留めもせずに、そのすべての言葉の順序、すべての文の順序をすっかり覚えてしまえるほど冴えた記憶力をもった人などまあ一人もいない……」から場所法の記憶術が開発されたという起源が、明和の記憶術ブームで再現されているようにも見えてくる。

『物覚秘伝』とその前後に起きた記憶術ブームの原因は他にも考えられることがあるかもしれない。が、今の筆者にはそれについて論じることはできない。しかし、青水先生による場所法の記憶術が、おそらく、同時代のもう一人の記憶の達人、塙保己一（一七四六―一八二二）の方法と対照的なものであったことは指摘しておいてよいかもしれない。保己一は、青水先生とはおそろくまったく異なる記憶の方法を通じて、偉大な計画に着手しようとしていた。幼くして視力を失った塙は、明和八年の記憶術ブームの数年後の安永八年（一七七九）、古代から同時代までの主要なテキストを集めた『群書類従』の計画を固めたと伝えられている⁽³⁴⁾。

保己一の記憶法はおそらく、テキストを音声データとして暗記

するということのだったのではないか。実際に彼が心の中でどのようなデータ処理を行っていたのかを知ることは難しいが、少なくともこれまで伝えられてきた保己一に関する逸話では、幼少時より視覚を失った彼が、読み聞かせてもらおうテキストをそのまま心に保存し、自由に語り直すことができたという。さらに、保己一が『大日本史』の校正に携わっていた時期について、藤田一正（幽谷）は『修史始末』（寛政三、一七九一）の中でこう述べている。寛政元年の冬、

……保己一人となり強記、よく皇朝の古書を誦し、旁ら典故に通ず。人の紀伝を読むを聴く毎に、凡そ其の事実の乖謬・「引用ママ」年月の錯誤、皆よく歴々と之を言ふ。遂に建議して云う、凡そ各条の注する所の出典、宜しく悉く原書に就き以て其の異同出入を質すべしと⁽³⁵⁾。

保己一の心に蓄えられた、おそらく音声変換されたテキストデータの正確さに、人々が仰天した様子である。

おそらく対照的な方式で記憶に挑んだ青水先生（彼が真実、一人の人物だったとすればだが）と塙保己一が、ほとんど同時期に現れたというのはきわめて興味深い偶然である。

いや、果たして単なる偶然なのだろうか。先に触れた朱子学や保己一のような国学者たちの官学的な学問方法と、それに対抗したとも考えられる『物覚秘伝』のようなきわめて民間的・民衆的な知の技法が、異なる源泉から生まれた二つの流れだった可能性、そして保己一と青水先生はそれらの流れの支流だった可能性

はないだろうか。

後者の流れが存在したと、ここで仮定してみよう。その流れをさかのぼった先には、ひょっとしたらシモニデスに由来するヨーロッパの場所法が現れるかもしれない。我々の探求の第二の出発点として、妖怪博士と呼ばれた近代主義者、井上円了に注目しよう。円了博士は、ヨーロッパ文化における記憶術の重要性がまだ明確にされていなかった時代、『物覚秘伝』とヨーロッパ的伝統との強い類似性を鋭い眼で喝破していた。

妖怪博士の記憶術講義

円了は、明治二十七年（一八九四）の『妖怪学講義』と大正六年（一九一七）の『活用自在 新記憶術』（青水先生口授の本文テキストをすべて書き写している）で、『物覚秘伝』に注目し、ヨーロッパの場所法と対比している。

円了による記憶術に関する論考は、近代日本におけるヨーロッパ的伝統の受容の様子を垣間見させてくれる。ここでしばらく、妖怪博士の記憶術講義の様子を覗いてみよう。

『妖怪学講義』では、怪異に関する合理的解釈の基盤となる近代科学的解説を行った「教育学部門」の中で、記憶術が取りあげられている。円了自身が被験者を用いて実施した記憶力調査（たとえば「君子は危うきに近よらず」、「ダーウィン氏進化論を唱う」などの文章に関する短期記憶、「楽」や「孫」などといった漢字一文字の短期記憶を問う）の結果も交えながら、記憶の過ちや二重化（記憶した内容が改変されていくこと）、連想のメカニ

ズムなどが論じられる。

その中で円了博士が『物覚秘伝』に注目したのは、おそらく二つの理由からである。第一に、博士は、同時代の日本で起きていた怪しげな記憶術ブーム（近代的な先進国である欧米から輸入された最新の技術であるかのようなふりをした）と一線を画した、いわばより真正な記憶術が日本にあったことに人々の目を向けたかった。第二に、ヨーロッパ的記憶術とは異なる源泉から生まれた方法を示すことで、ある種のナシヨナリズム的意識を発動させたかったのではないか。

妖怪やそれに類した超自然的経験を批判、解体するという目的の中で、なぜ記憶術もが矛先に置かれたのだろうか。円了は、自らが経験した明治の記憶術ブーム（先に見た明和のブームから約一〇〇年後という偶然も興味深い）を批判する。

顧みてわが国の状態を察するに、従来一種の記憶法を講ずるものありしも、決して今日のごとく盛んならざりしが、近年に至りては西洋の方法に倣いて、種々の新案を考定し、新聞に、雑誌にその効能を広告吹聴し、多分の入謝金を徴収してこれを伝授するものあるを見るなり。四、五年前、宮城県の小学校に在勤せる倉科某氏、記憶の新法を発見したりとて、予に示されたることあり。されど、その方法はおもに数字に基づきて事物を表示せるものにして、西洋今日の方法と格別異なるところあるを見るなり⁽³⁶⁾。

円了が目撃した記憶術ブームは、おそらく明治二十年代から四十年代にかけて起きたものと考えてよいだろう。このブームの実態に関しては岩井洋氏による研究があり、円了の記憶術理解の土台を理解する上で有益なツールとなっている⁽³⁷⁾。それによれば、たしかに円了が述べるように、明治二〇年代にはかなり怪しげな記憶術書、記憶術伝授業者が多く現れ、奇跡的な記憶力向上をうたって人々を煽ったらしい。

岩井氏が紹介している例を見ると、明治の記憶術ブームの大きなタイプは二つあり、ひとつは物理的・医学的に身体的能力を高めるものである。睡眠と起床、食生活や運動、さらには薬品まで用いて記憶力を強化するという、いかにも即効性のありそうな、しかし怪しげな記憶術である。一方では、様々な語呂合わせや図表化、さらにはイメージを利用する場所法に似た方法（しかしきわめて通俗化されている）などを紹介するものも多かった。これらは、どうやら同時代の欧米で書かれた記憶術に関するテキストを参照しながらまとめられた換骨奪胎的なものらしい⁽³⁸⁾。

このような日本の状況に対して、円了は、近代科学的基盤の上で記憶とその本性を捉え直し、あまりにも迷信的な技芸となってしまった当時の記憶術をいわば悪魔払いしようとする。『妖怪学講義』のちに記憶術をとりあげた『活用自在 新記憶術』では、そうした馬鹿げた記憶術ブームを「畢竟人間の迷信」と断じている⁽³⁹⁾。そのため、彼は自らの方法で記憶術、そしてそのアンチテーゼである忘却術を分類し、説明する必要を感じたのであった。

円了博士自身の記憶術に関する分類は実に熱心で詳細であり、

きわめて興味深いが、それはまたいつか聴講することにしよう。

『物覚秘伝』とヨーロッパ的伝統の関係を探るといふ目的にとって重要となるのは、「記憶術の歴史」と題する節（第七、教育部門、第二三節）である。ここで円了は記憶術のヨーロッパ的伝統を要約する。シモニデスの逸話を紹介し、場所法こそがヨーロッパの記憶術の王道となっていた歴史を簡単に紹介している。

円了博士の『物覚秘伝』への注目はおそらく、同時代における西洋の皮を被った怪しい記憶術ブームと、本家であるヨーロッパ的伝統の厚みの対置という文脈においてはじめて理解されるはずだ。『物覚秘伝』をきわめて手際よく要約してから（例の器物人間や『源氏物語』の範例も漏らさず紹介されている）⁽⁴⁰⁾、新聞に自ら書いた記事を再掲し、博士はこう述べる。「……そもそも記憶をよくする秘伝につきては、古来西洋にも日本に種々の方法を工夫せるものありて、決してさほど珍奇のことにあらず」⁽⁴¹⁾。

ここで述べられた、日本で様々な記憶法を提案した例が青水先生の『物覚秘伝』である。『活用自在 新記憶術』では、本文テキスト全体の書き写しに続けて、このように評価されている。「この一例によって、わが国にも古来かような記憶法を工夫した人があるといふことが明らかである。これは正しく配合法の適例であるから、ここに全文を引用して例証にした」⁽⁴²⁾。

円了博士はおそらく『物覚秘伝』の中に、ヨーロッパ的な記憶術の伝統と比較しても見劣りのしない方法を発見するとともに、器物人間や、『源氏物語』六十四貼の記憶のように、日本の風景に根ざしたイメージや文化的モチーフがふんだんに利用されていたことにも好感を持ったのではないだろうか。欧米先進国の受

け売りではなく、日本の風景に根ざして自立的に生まれたある意味では懐かしい記憶術がそこにある——そのように思ったのではないだろうか。円了博士の『物覚秘伝』に向けた眼差しを、このように再構成することは可能なはずである。

イグナチオ・デ・ロヨラの『靈操』——記憶術的要素

だが、それは本当に偶然の一致だったのだろうか。繰り返しになるが、ヨーロッパ的伝統と『物覚秘伝』はあまりにも似すぎてはいないだろうか。ヨーロッパ的伝統に含まれた多様な要素を、日本の風景に置き換える意図的な試みと考えるほうがむしろ自然なのではないか。

あらためて思いだそう。たとえば、「物見知りの秘伝」で述べられた、一瞬で十人の客たちの衣装を暗記する達人の逸話は、シモニデスが経験したとされる宴会の物語から、客たちの死というグロテスクな要素を排除し、風景を日本に置き換えたバージョンと考えることはできないだろうか。あるいは、メトロドロスの天球を利用した三六〇の場所を用いた記憶術の驚異は、『源氏物語』六十四帖というきわめて日本的なイメージへとそのまま置き換えることができるだろうか。あるいは、福音書の出来事を記憶する怪物的なイマギネス・アゲンテスは、青水先生の器物人間へと容易に変身することができたのではないだろうか。

鎖国がはじまる江戸時代以前、日本にヨーロッパ的記憶術が流入していたかもしれない。仮にそうだとしたら、ルートのひとつとして考えられるのは、イエズス会の宣教師たちの活動である。

もちろん、このルートをたどるのは困難である。しかし、ここで、そのルートを描きだすことができる可能性を信じてみよう。実線ではないが、少なくとも点線は引けるかもしれない。なぜならば、イエズス会の宣教において、記憶術がきわめて重要な要素として組みこまれていたからである。

イエズス会創設のリーダー、イグナチオ・デ・ロヨラ（一四九一—一五五二）は、一五二二—二四年頃、『靈操』（精神的修行：Exercitia spiritualia）というきわめて興味深い、重要なテキストをまとめた。このテキストは、イエズス会の修道士ばかりでなく、世界の宣教先での布教におけるマニュアルとしても活用された。

若い頃、世俗の快楽と名誉を追求していたイグナチオは、ポルトガルを攻めてきたフランスとの戦争で負傷し、長い療養生活にあつた。そのとき、いくつかの聖人伝を読みながら瞑想的な経験を行い、神的なヴィジョンを得た。その経験をもとにして理論化されたテキストが、この『靈操』である。

『靈操』の日本語訳と詳細な註釈版のおかげで、我々は今日、イグナチオとイエズス会士たちの記憶術的実践を間近で見ることができる⁴³。ここで少しのあいだ、イグナチオとイエズス会士たちの通過儀礼的修行に体験入学させてもらおう。

靈操は、基本的には四週間で構成された瞑想プログラムと言える。第一週の靈操では、人間の罪を自覚し、それを悔い改めるための瞑想である。続いて、地上に降りたイエスの伝道が第二週目、イエスの受難が第三週目、そして復活が最後の第四週目の主題となり、それぞれ一週間、全体では四週間の過程となる。

第一週目の第一靈操における罪の問題を見てみよう。出発点

は、心の中に場所を設けて、多様な罪のイメージを「観想」することである。

想像力を使って、観想（黙想）しようとする出来事の現場に身を置く。ここで注意すべきことは、目に見える事柄、たとえば、われわれの主キリストを観想したり、黙想したりするに当たって、「現場に身を置く」とは、観想しようとする事柄が置かれている状況（有形の場所）をありありと創造の眼で見ることである。有形の場所とは、観想しようとする題目に応じて、たとえば、イエス・キリストや「われわれの貴婦人（ヌエストラ・セニョーラ）」がおられた神殿とか山などのことである。

目に見えない事柄、たとえば、この罪の黙想がそうであるが、「現場に身を置く」とは、私の魂がこの朽ちてしまう体に閉じ込められているのを想像の眼で見、魂と体が合成されている人間全体が、獣たちの中に放逐されたかのように、涙の谷（この世）に置かれていることを想像の眼で見て考察することである（門脇佳吉訳）⁽⁴⁴⁾。

場所法の応用バージョンであることは明らかである。相違点は二つある。第一に、イグナチオのアイデアでは、イメージが配置される場所はひとつの具体的な風景であって、区画化された空間と言えるかどうかはつきりしていない。第二に、イグナチオの目的は演説ではなく、イメージを利用して、罪を心と身体に強烈に刻みつけることである。罪そのものは概念であり、一定の形や色を持たない。しかし、それを何らかのイメージに変換して心の

中に設けられた場所（ロキ）に置くことで、単にテキストを読む以上に強烈な感情が生まれる。イマギネス・アゲンテスの遊戯的性格を逆手にとって、ここでは宗教的敬虔を極度に高揚させるために記憶術が利用されている。

心の中に置かれるイメージの用例（「要点」として記述される）は、第一に墮天使の罪、第二にアダムとエヴァの原罪、第三は地獄に落ちた靈魂である。霊操の体験者は、それらのイメージに自分自身を投影するとともに、罪とその結果を自らの心と身体に反映させることで罪を追体験する。

それらの観想に続いて、今度は、十字架上のイエスの姿を想像し、それと向かうことになる。「創造主でありながら人間になられ、永遠のいのちからこの世での死去に至るまで、私の罪のために十字架上の死を遂げられたことを思い起こしながら対話するのである。また、私自身に眼をそそぎ、私はキリストのために何をしたか、いま何をしているか、これから何をすべきかを思いめぐらし、十字架につけられた御有様を見ながら、心におのずから起こってくることに従って、主と対話する」⁽⁴⁵⁾。

イグナチオは、場所法の記憶術で重要となるイメージの生命力を獲得するために、現実の中からイメージを取り出すことを推奨している。「次の三点は自分の罪を思い起こすのに助けになるであろう。第一に、これまで住んでいた場所や家をよく見る。第二に、これまで他者と交わってきた会話を思い起こす。第三に、これまで果たしてきた職務について考える」⁽⁴⁶⁾。自らの記憶を源泉として想像されたイマギネス・アゲンテスが、心の中で活性化し、自らの罪を映し出すいわば鏡となるのだ。

たとえば、第一週目の第五靈操では罪に対する罰、すなわち地獄が主題となる。そこでは、「地獄の長さ、広さ、深さを想像の眼をもって見る」こと、「……地獄に落ちた者が堪え忍んでいる責苦を全身で感得するように願う」こと、「想像の眼で、地獄の燃え狂う炎と、その中で焼かれている魂たちを見る」ことが推奨されるが、そればかりではない。視覚を通じて、他の感覚までもが召喚される。「耳で、地獄の泣き叫びと悲鳴を聞き、主キリストと諸聖人に対する冒涇の声を聴」いたり、地獄の噴煙と硫黄の悪臭、ごみ溜めや腐敗物の悪臭を嗅いだり、苦い涙を味わい、炎に身を焦がすのである⁽⁴⁷⁾。

『靈操』は、イエズス会の宣教師たちの基本的テキストだった。何らかの方法で、このテキストが日本に入ってきたことには疑問の余地がない。慶長元年（一五九六）、天草で『靈操』のラテン語版が印刷出版されたことが分かっている⁽⁴⁸⁾。さらに、イグナチオとともにイエズス会の創立に尽力したフランシスコ・ザビエル（一五〇六頃―一五六二）は、日本を訪れる前後の手紙の中で、『靈操』の重要性を他の宣教師たちに繰り返し述べている⁽⁴⁹⁾。そうした活動の中で、記憶術の理論と実践に関する知識が授受されたという可能性は高いのではないか。

記憶術のゲーム的本性と歌留多

日本ではないが、明代の中国におけるきわめて驚嘆すべき事例が知られている。イエズス会の宣教師マッテオ・リッチ（一五五二―一六一〇）が、一五九六年前後の時期、宣教の一環として、

かなり詳細に場所法の記憶術を伝授したことが知られているのだ。ジョナサン・スペインスの研究によって注目されたリッチの「記憶の宮殿」は、中国の風景に合わせてアレンジされた場所法である⁽⁵⁰⁾。

一五九六年に書かれたリッチのテキスト『記法』(Jiya: 『西國記法』Xiguo Jifaとも)では、シモニデスの逸話が引かれ、イマギネス・アゲンテスを用いた場所法が解説されている。リッチの「宮殿」には、シモニデスの三六〇を超える一〇〇〇の場所(ロキ)が設定され、一〇〇〇のイメージが配置され、その中を「歩いて」観想することが推奨されている。『記法』では、四つのイメージからなるユニットの例が提案されている。争う二人の女戦士、西方の部族の女、穀物を収穫する農夫、子供を抱く召使いの女のイメージが、宮殿内の大広間の四隅に配置されることになる⁽⁵¹⁾。

リッチの記憶術は、特に場所の数において場所法のかなり極端かつ典型的な事例であるとともに、ヨーロッパ的伝統がその外部に広がるがあったという事実を示している。さらに、最近、ペルーを訪れたイエズス会の宣教師ホセ・デ・アコスタ（一五四〇―一六〇〇）が、マッテオ・リッチが明で行ったのと同じように記憶術の方法を利用していたことが、ハイデルベルク大学の研究者アナ・カロリーナ・ホスネによって明らかにされている⁽⁵²⁾。

リッチやデ・アコスタの実践についてはあらためて詳しく考察しなければならない。が、しかしそれらの場合と同様に、日本でも、イエズス会の宣教師たちを通じて、場所法の伝統が伝えられた可能性はある。たとえば、東インド管区の統括者、アレクサン

ドロ・ヴァリニャーノ（二五三九―一六〇六）は一五七九―八一年と一五九〇―一六〇三年に日本に滞在して、宣教に努力した。このヴァリニャーノは、リッチにさまざまな指示を与えた上司にあたるのだ。彼は豊後府内にコレジヨ（神学寮）を設立し、そこで宣教のための『日本コレジヨ講義要綱』という貴重なテキストが残されている⁽⁵³⁾。それらの宣教の中で、『靈操』やそこに含まれた記憶術の方法が授受されたかもしれない。

他方、日本以外の世界を経験した日本人たち、いわゆる遣欧使節たちによって、ヨーロッパの記憶術的伝統が導入されたという可能性も皆無とは言えない。たとえば、イエズス会の主導によって実現した天正遣欧少年使節たちは、活版印刷機や楽器、航海用の道具などを持ち帰った。彼らの心の中に、記憶術に関する知識が文字通り記憶されていたかもしれない。

ここできわめて興味深い例が思い出される。それはいわゆる歌留多のゲームである。歌留多の起源は、宣教師を運んできた船員らが持ち込んだ絵入りカードゲームと日本の伝統的な貝合せや歌合わせの遊戯の融合であったと考えられている。

この融合の起源をはっきり定めることは難しいが、その後生まれた源氏物語歌留多や小倉百人一首歌留多などが、まさしく記憶術的システムを忠実に利用したゲームであることは注目される。詩句（言葉）とそれを何らかの形で表した絵（イメージ）が物質的な場所であるカードに託され、プレイヤーは自らの記憶を武器にして競争する⁽⁵⁴⁾。

ちなみに、歌留多が生まれるのとはほとんど同時代のヨーロッパでも、記憶術の遊技的性格への注目が高まり、イメージと言葉を

複雑に組み合わせたゲーム形式を生み出した（図7）⁽⁵⁵⁾。洋の東西を問わず、場所法の記憶術の遊技性が人々を魅了したことを端的に示す興味深い事例である。

それはともかく、歌留多のように、記憶術の原理と実践が、ヨーロッパの伝統との接触を通じて日本に入ってきた可能性は無視しがたいはずだ。

ひとつの思考実験の提案

次のように空想したとしても、無意味ではないはずだ。キリスト教信仰の場を通じて、場所法の記憶術に関する知識が授受され、さらにそれが多様な空間へと伝播したかもしれない。そしてそれらは、豊臣秀吉やその後の将軍たちによる禁教令と鎖国の流れの中で、官学的世界ではなく、民衆的な知へと合流することがあったのではないか。そしてその支流のひとつが『物覚秘伝』だったのではないか……

今は空想に過ぎない。もしこの空想への肉付けを試みるとすれば、精査しなければならないテキストは山積みである。『日本コレジヨ講義要綱』、ルイス・フロイスらのイエズス会のいわゆる『日本通信』または『日本年報』の膨大な手紙、そしておそらく『靈操』のような宣教のためのテキストを参照して慶長十二（一六〇六）年に出版され、日本語版も多く制作されたとされる『スピリツアル修行』のテキスト等々——これらのテキストを、記憶術の痕跡という観点から調査しなければならない。

その一方で、イエズス会の宣教以外のソースやルーツも探求

し、それらとの関係も確かめなければならない。第一に、日本の中に、場所法の原理ないしその源泉となりうるものがなかったか。先に触れたように、日本にも多くの記憶の達人がいた。日本の文化史においても、場所法と相通じるものが発見できるのではないか。

第二に、中国や朝鮮のような日本の文化に大きくて強い影響をもたらした世界で、場所法の記憶術のルーツは探せないだろうか。たとえば、泰山の泰山摩崖石刻のような風景は、物質化された場所法のプロセスと言えないだろうか。ここでは、場所（断崖）に、記憶すべきもの（この場合はイメージではなく文字＝テキストだが）が配置され、巨大な風景となっている（図8）。

第三に、中国や朝鮮、日本の詩論や画論、あるいは詩や絵画の実践において、記憶術的方法に似たものが探せないだろうか。たとえば、山水画形式が文字（テキスト）と風景（イメージ）によって再構成された一種のユートピアに限りなく接近することを目指そう。ここに、記憶術的な思考プロセスに似た何かが起動する余地はないだろうか。

また、青水先生の依託種子の方法で創造される怪物的イメージが、江戸の化物草子、あるいは歌川国芳の奇怪な人体構成（たとえば「人かたまつて人になる」）に近く思われることにも驚かされる。辻惟雄氏によって切り開かれた「奇想の系譜」が、青水先生の記憶術と結びついた可能性もあるだろう。

そして、これらの課題の先には、最も高いハードルも待っている。それらのテキストに示された点が、いかなる回路を通じて、『物覚秘伝』に結びつきえたのか、あるいはえなかったのか。明

和八年という年代がすでにイエズス会の宣教から遠くへだった時代であることを考えれば、間接的なルートも想定しなければならぬ。果たして、実証的な方法でこの壁を突破することが可能なのだろうか。テキストのレベルで跡づけることはできるのだろうか。

多くの課題と難問が我々を待ち構えている。しかし、我々の当初の目的、すなわち『物覚秘伝』の記憶術をヨーロッパ的伝統と比較し、場所法の記憶術の本性をあらためて浮き彫りにするという目標は、それなりに達成されたのではないだろうか。これから研究の広がりや深まりを夢想しながら、今はただ、この興味深い江戸時代のテキストが、古代ギリシア以来のヨーロッパ的伝統との無視しがたい強い類似性を示しているという事実を驚きの眼で見つめることにしよう。

付記

この文章は、JSPS 科研費 15K02131 の助成による研究の成果です。基盤研究 (C)「マニエリスム形成期における記憶術の影響についての研究」(研究代表者 足達薫)。This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number 15K02131 for Scientific Research (C), Studies in the Influences of the Art of Memory on the Mannerist Art, Kaoru Adachi.

註

- (1) キケロー『弁論家について』大西英文訳、上下巻、岩波文庫、二〇〇五年、下巻、86, 351、九三―九四ページ。Cicero, *De oratore*, Books I-II, with an English Translation by E. W. Sutton, completed with an Introduction by H. Rackham, Harvard University Press, Cambridge Massachusetts, London, England, The Loeb Classical Library, Cicero III, LCL 348, revised edition, 1948 (2001), p. 464.
- (2) キケロー『弁論家について』前掲書、下巻、86, 353、九四―九五ページ。Cicero, *De oratore*, cit., pp. 464-466.
- (3) キケロー『弁論家について』前掲書、下巻、86, 354、九五ページ。Cicero, *De oratore*, cit., p. 466.
- (4) キケロー『弁論家について』前掲書、下巻、87, 357、九六―九七ページ。Cicero, *De oratore*, cit., p. 468.
- (5) クインティリアヌス『弁論家の教育』全二巻、小林博英訳、明治図書、一九八一年、第二巻、第十一卷第二章、22、八八―八九ページ。
- (6) 四つの基本文献の日本語版によって充実した基盤が整えられている。フランセス・A・イエイツ『記憶術』玉泉八州男監訳、青木信義、井出新、篠崎実、野崎睦美訳、水声社、一九九三年・P（パオロ）・ロッシ『普遍的鍵ルルスからライブニッツにいたる記憶術と結合論理学』清瀬卓訳、国書刊行会、一九九四年・メアリー・カラザース『記憶術と書物中世ヨーロッパの情報文化』別宮貞徳監訳、柴田浩之、家本清美、野口通子、別宮貞徳訳、工作舎、一九九七年・リナ・ボルツォーニ『記憶の部屋印刷時代の文学的―図像学的モデル』足達薫、伊藤博明訳、ありな書房、二〇〇七年。
- (7) 青水先生口授、藤逸章較『物覚秘伝』明和八年十二月、京都書肆八尾精兵衛、本文十三裏。この文献からの引用では、読みやすさを考慮し、井上円了『活用自在新記憶術』における書き起こしとそれを現代漢字および仮名で修正した井上円了記念学術センター選集版（後註9）を参照し、踏襲した。また、井上円了博士の人名に關しても選集版を踏襲した。
- (8) 『物覚秘伝』前掲書、本文十四表―裏。
- (9) 井上円了『活用自在新記憶術』、井上円了記念学術センター編『井上円了選集』第一〇巻、東洋大学、一九九一年、二五七―四〇三ページ・井上円了（井上円了講述、根本和一郎筆記）『妖怪学講義』第七 教育学部門、井上円了記念学術センター編『井上円了選集』
- 第一八巻、一九九九年、三二二―五二〇ページ。特に以下。教育学部門付録、記憶術批評（某雜誌登録）、四九三―五〇八ページ。さらに以下も参照したが、引用は選集版から行った。井上円了『活用自在新記憶術』文晶堂・明文館、大正六年八月十日（国立国会図書館00000571618）。
- (10) 甘露純規『江戸の記憶術と忘却術——青水先生『物覚秘伝』と建部綾足『古今物わすれ』』、『中京大学図書館学紀要』第三一号、二〇一〇年、三三―七九ページ。
- (11) 美術史学者イヴ・アラン・ボワによれば、「仮晶」現象の文化史的ツールないし物差しとしての利用はシュペンGLER『西洋の没落』を源泉とし、のちに美術史学者エルヴィン・パノフスキーのいわゆるイコノロジーの方法の中に組みこまれたという。二〇一〇年のボワによるセミナーと、それに関する田中純氏によるきわめて重要な解説を参照。田中純「擬似形態学か仮晶学か」(<http://before-and-afterimages.jp/news2009/2010/10/post-106.html>)。
- (12) テクストについては前註6、『物語秘伝 後篇』については前註9の論文を参照。
- (13) 『物覚秘伝』前掲書、本文一（乙）表。
- (14) 『物覚秘伝』前掲書、本文一（乙）裏。
- (15) 『物覚秘伝』前掲書、本文三表―裏。
- (16) フィリップ・ジェズアルド『プルートルソフィア』パドヴァ、1592年、第27紙葉表（Filippo Gesualdo, *Plutosofia*, Padova, Paolo Magietti, 1592, c. 27r）。*L'arte della memoria per figure con il fac-simile dell' Ars memorandi notabilis per figuras evangelistarum* (1470), a cura di Mino Gabriele, Postfazione di Ugo Rozzo, La Finestra editrice, Trento, 2006, p. 61.
- (17) 『物覚秘伝』前掲書、本文四裏―五表。
- (18) 『物覚秘伝』前掲書、本文九裏。
- (19) 『物覚秘伝』前掲書、本文十一表―十二表。
- (20) 『源氏物語』のテクスト全体には驚くほど多くの絵画的語彙、あるいは色彩や線や視覚的裝飾に關わる語彙が溢れている。これについては以下の重要な調査を参照。須藤弘敏編『文化史研究支援「源氏物語」語彙データベース報告書』第一集、弘前大学人文学部日本文化論研究室、一九九〇年。
- (21) 川名淳子『物語世界における絵画的領域 平安時代の表現方法』ブリュッケ、二〇〇五年。
- (22) 『物覚秘伝』前掲書、本文六裏―七裏。

- (23) アリストテレス『記憶と想起について』副島民雄訳、『アリストテレス全集6 靈魂論、自然学小論集、氣息について』、岩波書店、一九六八年、二二四―二三九ページ、特に二二五ページ。
- (24) アリストテレス『記憶と想起について』前掲書、二二五―二二六ページ。
- (25) アリストテレス『記憶と想起について』前掲書、二三〇ページ。
- (26) キケロー『弁論家について』前掲書、下巻、87, 358、九九ページ。Cicero, *De oratore*, cit., p. 470.
- (27) キケロー『弁論家について』前掲書、下巻、87, 357、九六―九七ページ。Cicero, *De oratore*, cit., p. 356.
- (28) *Rhetorica ad Herennium*, with an English Translation by Harry Caplan, The Loeb Classical Library 403, 1999, III, XXII, 38, pp. 218-220.
- (29) *Rhetorica ad Herennium*, cit., III, XX, 33-34, pp. 214-216.
- (30) *Rhetorica ad Herennium*, cit., III, XX, 33-34, p. 220.
- (31) 一四七〇年の版は以下に於て。L'arte della memoria per figure con il fac-simile dell' *Ars memorandi notabilis per figuras evangelistarum* (1470)..., cit. 一五〇二年版は Google Books で公開されている版 (二〇一六年十一月二六日) を参照する。フランクフルト版も参照。Ars memorandi. A Facsimile of the Text and Woodcuts Printed by Thomas Anshelm at Pforzheim in 1502, The Houghton Library, Harvard University, Department of Printing and Graphic Arts, 1981.
- (32) *The Medieval Craft of Memory: An Anthology of Texts and Pictures*, Edited by Mary Carruthers and Jan M. Ziolkowski, University of Pennsylvania Press, Philadelphia, 2002, Anonymous, *A Method of Recollecting the Gospels*, translated by James W. Halporn, pp. 255-293. イマギネス・アゲンテスの過剰な暴走、現実からの完全な逸脱について疑問をもつ記憶術師もいたことは重要である。たとえば、クインティリアヌスは『弁論家の教育』の少なからぬ部分を記憶術解説に割いている (第十一巻第二章「記憶について」)。クインティリアヌスはキケロを参照しながら、さらに具体的に詳細なマニュアルを提示している。記憶術は「技芸」(ars)であり、本性 (natura) としての記憶力が「理論」(ratio) で強化されるという図式が提示されており、記憶術が自立した技芸としてほぼ確立していたことが窺われる。しかし、すでに触れた、メトロドロスの神話——天の三六〇の場所を自在に操る場所法の達人——への疑念からも分かるように、クインティリアヌスは概して、イマギネス・アゲンテス、すなわち怪物的なイメージを用いる記憶術に対して批判的である。クイン
- ティリアヌスは言葉でイメージに変換する際、限界があることを強調する。長くて複雑な文章を記憶するために、あらゆる単語をひとつのイメージに変えて連続させるとあまりにも複雑で奇怪な連続体になってしまう、かえって記憶しにくくなるだろう。それは、場所法の原則であると同時に目標でもあった明瞭に秩序立てられた記憶とはいわば逆の方向に進むことである。それに対して彼は、演説内容をいくつかの部分に分けて、それぞれをユニット化して記憶するという方法を提案する。そうすれば、全身が器物になって炎を拭きながら臍で茶を沸かす男や、犯人の指から垂れ下がる羊の睾丸になった証言者などが入り乱れる怪物的イメージになることは避けられるだろう。
- (33) 甘露純規「江戸の記憶術と忘却……」前掲論文、二〇ページ。
- (34) たとえば以下を参照。太田善磨『塙保己一』吉川弘文館、一九六六年。保己一の記憶方法に関しては今後の研究課題である。
- (35) 太田善磨『塙保己一』前掲書、九二ページ。
- (36) 井上円了『妖怪学講義』前掲書、四四八ページ。
- (37) 岩井洋『記憶術のススめ近代日本と立身出世』青弓社、一九六二年。
- (38) たとえば、ダビッド・ケー著、渋谷保訳『記憶術』(明治二七年五月、博文館) が紹介されている。このテキストは完全な翻訳ではなく、以下のテキストの一部を抜粋してまとめたものらしい。David Kay, *Memory: What it is and How to Improve it*, D. Appleton and Company, New York, 1888; Th. Ribot, *Diseases of Memory. An Essay in the Positive Psychology*, D. Appleton and Company, New York, 1882.
- (39) 井上円了『活用自在新記憶術』前掲書、三〇六―三〇七ページ。
- (40) 井上円了『妖怪学講義』前掲書、四四六―四五〇ページ。ヨーロッパ的文脈では、活版印刷による書物の発展、特に豊かな挿絵や図版を備えた書物の普及とともに、場所法の記憶術は次第に役割を奪われていくことになる。記憶術の理論と実践において生じた多様な経験、変容、あるいは衰退は、いわば近代という時代の本性を捉えるためのリトマス試験紙のようなものである。しかし、円了は、近代において場所法の記憶術はむしろ隆盛したと理解している。円了の要約では、場所法がそのまま直接的に近代に連続し、発展したとされるが、これは歴史的観点からは怪しい議論である。
- 円了博士が挙げている近代の記憶術の例に関しては、『妖怪学講義』選集版では特に註釈されていない。ここでそれらについて少し註記することも無駄ではないだろう。

一七世紀の「ウインケンマン」という人物は、円了によれば場所法の近代における完成者であり、イロハ（アルファベットのこと）と数字を用いて記憶する方法を発見したとされる。この人物はおそらく、ドイツのギーセンで生まれた著述家ヨハン・ユスト・ヴィンケルマン（一六二〇―一六九九）のことだろう。一六四年頃ヴィンケルマンはシュタニスラウス・ミンク・フォン・ヴォインスヘムなる筆名で『記憶術の世界（パルナッソス）からの新提案』（*Relatio novissima ex parnasso de arte reminiscetiae, Das ist: Neue wahrhafte Zeitung aus dem Parnassus von der Gedechniss-Kunst*）という記憶術マニュアルを出版した。

ヴィンケルマンは場所法も用いているが、彼がこのテキストで詳しく述べたのは、むしろ数字とアルファベットを利用した一種の略記式暗号法である。のちに「メジャー・システム」などと呼ばれることになるこのきわめて複雑な方法は、現代でもコンピューターを利用して様々に用いられており、イメージを利用する場所法とはまったくといっていいほど異なっている。円了によればヴィンケルマンの方法は哲学者ゴットフリート・ライブニッツ（一六四六―一七一六）によって「改良」されたが、これはライブニッツによるライモンドゥス・ルルス（一二三二頃―一三二六）の「組み合わせ術」（結合術）の研究とその発展型のことを指しているはずである。ルルスの技法は「場所」を用いて言葉を操作し記憶するものであり、たしかに場所法との共通性はあるが、イメージが介在する余地がないという決定的な相違点がある。円了はさらに「リチャード・グレー」「すなわち一七三〇年『記憶の技術』（*Mamoria Technica*）を著したイングランドの聖職者や、「ファイネーグル」「すなわちドイツの記憶術師グレゴール・フォン・ファインアイグレ（一七六〇―一八一九年）」が近代の場所法をさらに発展させたとする。いずれの方法もイメージを媒介にする場所法とはかけ離れたものであり、アルファベットと数字を用いた一種の暗号法である。ヴィンケルマンのテキストは以下を参照。Stanisl: Mink von Weunsschem Relatio novissima ex parnasso de arte reminiscetiae, Das ist: Neue wahrhafte Zeitung aus dem Parnassus von der Gedechniss-Kunst (Electronic ed.), ca. 1648. <http://diglib.hab.de/drucke/202-74-quod-4/start.htm> (二〇一六年十一月二日最終確認)。ヴィンケルマンについては以下を参照。Julius Pistor, "Winckelmann, Johann Just", *Allgemeine Deutsche Biographie*, 1898. <https://www.deutsche-biographie.de/sfz85728.html#adbContent> (二〇一六年十一月二日最終確認)。ヴィンケルマンと「メジャー・

システム」に関しては例えば以下のような現代の記憶術マニュアルでも触れられている。James B. Worthen, R. Reed Hunt, *Mnemonics for the 21st Century*, Taylor and Francis, New York, 2011, s. n. (Kindle 版)。現代の記憶術解説書で頻繁に紹介される「メジャー・システム」だが、その詳細、特にヴィンケルマンに影響を与えたとされるを確かめることができなかった。これからの課題としたい。グレイの方法については以下を参照。Francis Fauvel-Gouraud, *Phrenomnemoctechy: Or, The Art of Memory*, Wiley and Putnam, New York and London, pp. 60-67. フォン・ファインアイグレの方法については以下を参照。Fauvel-Gouraud, *Phreno-mnemoctechy*, ... cit., pp. 67-85.

(41) 井上円了『妖怪学講義』前掲書、四九四―五〇〇ページ。ここで円了は『記憶術講義』という別のテキストについても触れているが、そちらを精査することができなかった。今後の課題とする。

(42) 井上円了『活用自在新記憶術』前掲書、二九六ページ。

(43) イグナチオ・デ・ロヨラ『霊操』門脇佳吉訳・解説、岩波文庫、一九九五年。

(44) イグナチオ・デ・ロヨラ『霊操』前掲書、一〇〇ページ。

(45) イグナチオ・デ・ロヨラ『霊操』前掲書、一〇四―一〇五ページ。

(46) イグナチオ・デ・ロヨラ『霊操』前掲書、一〇六ページ。

(47) イグナチオ・デ・ロヨラ『霊操』前掲書、一一四―一一五ページ。

(48) この版は失われてしまった。高橋勝幸『イエズス会日本コレジョの講義要項』に見るA・ヴァリニャーノの適応主義的布教方針』、『アジア・キリスト教・多元性』第九号、二〇一一年、三一―五〇ページ、特に四〇ページ、註40を参照。 <http://dx.doi.org/10.14989/139308> (二〇一六年一月三〇日最終確認)

(49) たとえば以下で触れられている。『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』全四巻、河野純徳訳、平凡社、一九九四年・第一巻、書簡第六、六三ページ・第一巻、書簡第十六、一五六―一五七ページなど。

(50) ジョナサン・スペンス『マッテオ・リッチ記憶の宮殿』古田島洋介訳、平凡社、一九九五年。

(51) スペンス『マッテオ・リッチ……』前掲書、二九ページ。

(52) 『イエズス会日本コレジョの講義要綱』I―III巻、尾原悟編、教文館、一九九七年。この重要なテキストにキケロの影響が見られるという指摘がある。キケロが記憶術に関する初期の紹介者であることを考えればきわめて興味深く、次の検討課題となるだろう。

<https://www.iwanami.co.jp/moreinfo/0281620/js/another01.html> (二〇一六年十一月三〇日最終確認)



図1 青水先生口授、藤逸章較『物覚秘伝』
明和八年十二月、京都書肆八尾精兵衛。

- (53) HOSNE, Ana Carolina. The "Art of Memory" in the Jesuit Missions in Peru and China in the Late 16th Century. *Material Culture Review / Revue de la culture matérielle*, [S.l.], jan. 2012. ISSN 1927-9264. Available at: <<https://journals.lib.unb.ca/index.php/MCR/article/view/21407>>. Date accessed: 29 nov. 2016. (二〇一六年十一月三〇日最終確認) 同じ時期に同じような眼差しでヨーロッパ的な記憶術の交通現象を見つめた仲間がいたことに大きな驚きと喜びを感じる。
- (54) たとえば以下の資料館の解説を参照。大牟田市立三池カルタ・歴史資料館、「カルタと大牟田の歴史」<http://kanata-rekishi.com/history/> (二〇一六年十一月三〇日最終確認)
- (55) Francesco Marcolini, *Le sorti iniolate giardino d'o pensieri. Ristampa anastatica dell' edizione 1540 con nota di Paolo Procaccioli*, Edizioni Fondazione Benetton Studi Ricerche / Viella, Treviso, Roma, 2007, p. LXIII. 川の興味深いテキスト、および記憶術のゲーム的次元については以下を参照。ボルツォーニ『記憶の部屋……』前掲書、一四五―二〇九ページ(第三章「記憶のゲーム」)。

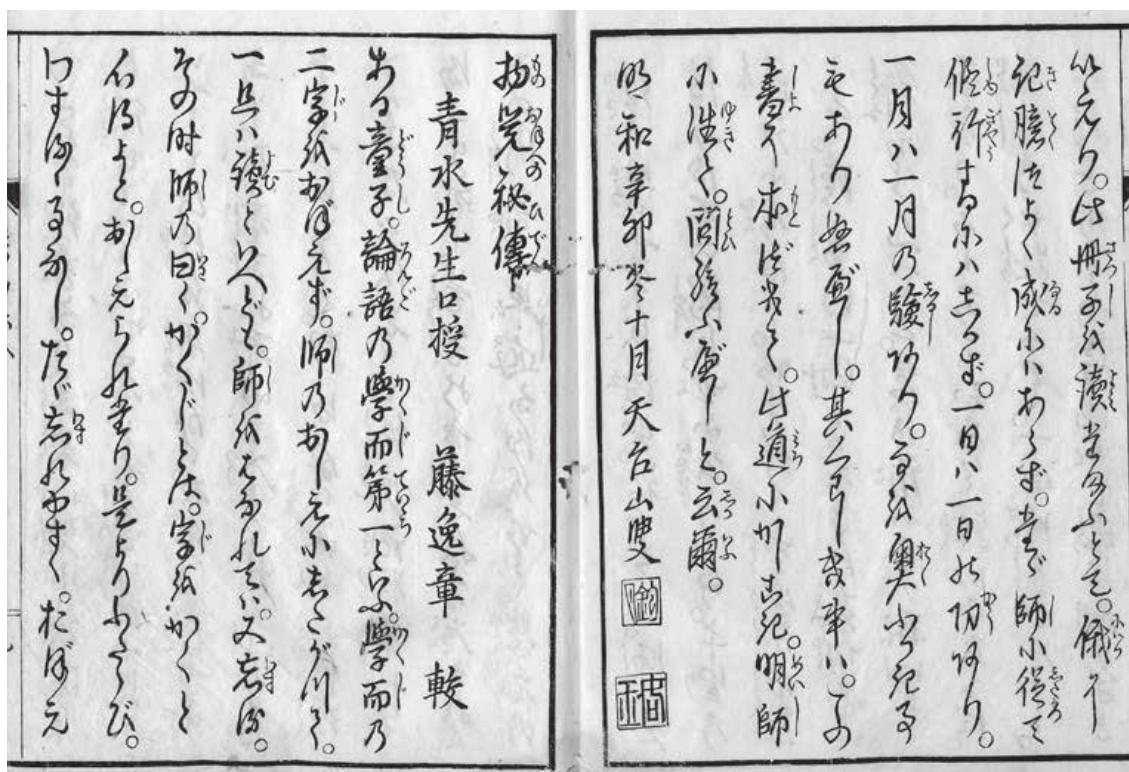


図2 『物覚秘伝』序四裏 - 本文乙表。

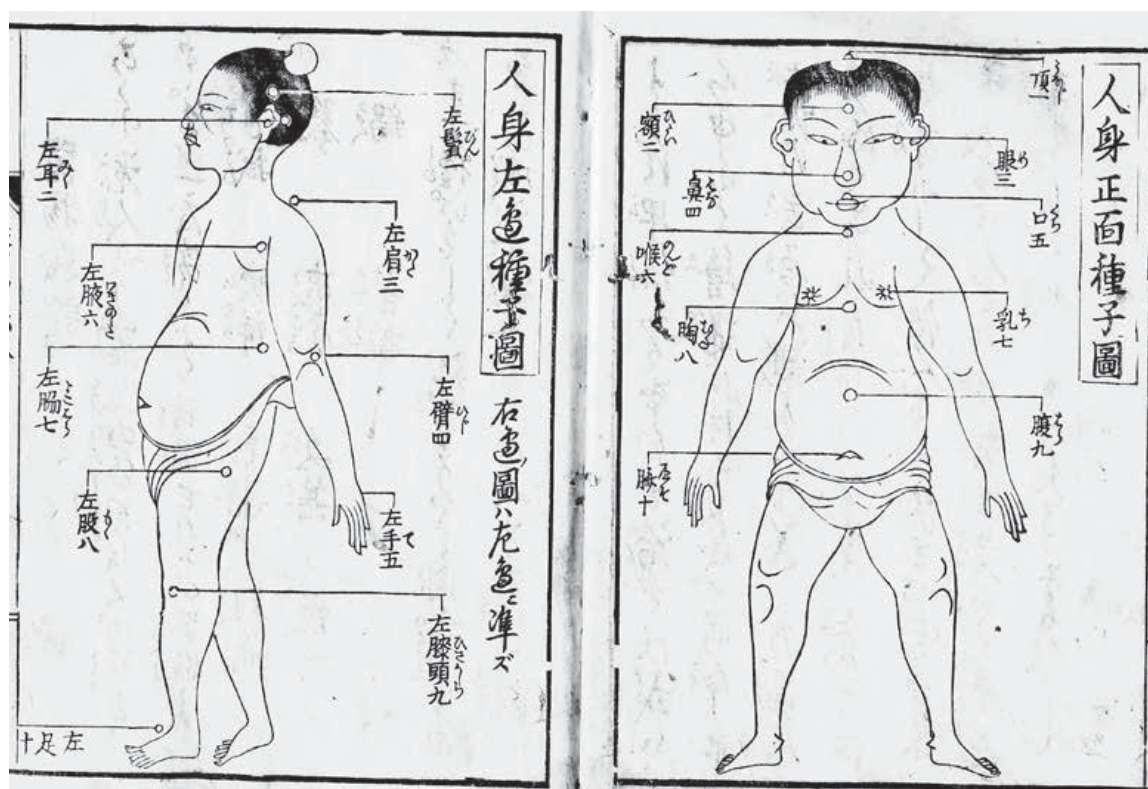


図3 『物覚秘伝』本文五裏 - 六表。

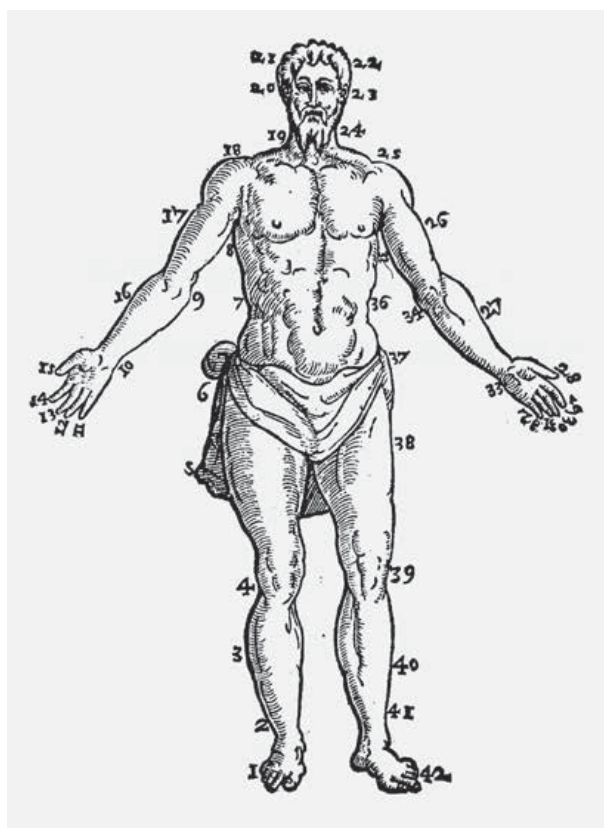


図4

フィリッポ・ジェズアルド『プルートソフィア』パドヴァ、1592年、第27紙葉表 (Filippo Gesualdo, *Plutosofia*, Padova, Paolo Magietti, 1592, c. 27r). *L'arte della memoria per figure con il facsimile dell' Ars memorandi notabilis per figuras evangelistarum* (1470), a cura di Mino Gabriele, Postfazione di Ugo Rozzo, La Finestra editorice, Trento, 2006, p. 61.



図5

作者不詳『福音書における事績を図によって記憶する技』一四七〇年、パヴィア、市立美術館、第一紙葉裏 (Sezione Stanza Malaspina, n. 4780-4913, c. 1v) *L'arte della memoria per figure con il fac-simile dell' Ars memorandi notabilis per figuras evangelistarum* (1470), a cura di Mino Gabriele, Postfazione di Ugo Rozzo, La Finestra editorice, Trento, 2006.



図6

ゲオルク・シムラー編『記憶術』トマス・アンセルム、フォルツハイム、1502年、aiii紙葉。Ars memorandi, ed. Georg Simular, Thomas Anselm, Pforzheim, 1502, c. aiii.



図7

フランチェスコ・マルコリーニ『運命、または思惟の庭』ヴェネツィア、1540年、63ページ、「メランコリーに関するカードの目への指示」。Francesco Marcolini, *Le sorti intitolate giardino d'o pensieri*. Ristampa anastatica dell' edizione 1540 con nota di Paolo Procaccioli, Edizioni Fondazione Benetton Studi Ricerche / Viella, Treviso, Roma, 2007, p. LXIII.

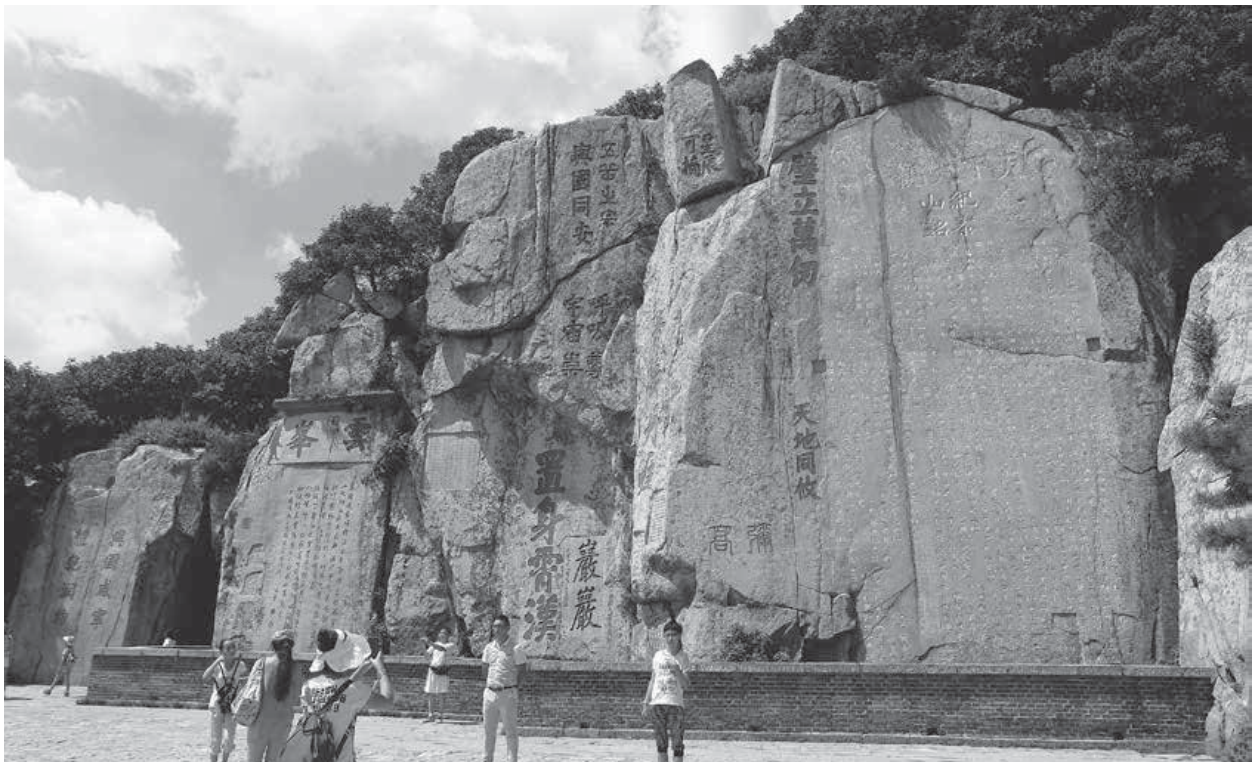


図8 山東省泰安、泰山摩崖石刻

https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/3/37/Tai_Shan_2015.08.12_13-28-10.jpg